

ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ

佐藤 弥生¹・小川 俊輔²

【要旨】本研究では、ハワイ島外での生活経験を持つハワイ出身の日系移民4世・5世の3名を対象に、英語によるインタビュー調査を行い、3名のアイデンティティの構造、アイデンティティ構築の軌跡、要因を分析した。

インタビューの後、インタビューを文字起こししてデータベースを作成、その中から調査協力者の日本・アメリカ・ハワイに対する帰属意識やアイデンティティについての語りを抽出した。3名のうち1名については1次調査から期間を置いて2次調査を行い、再分析を行った。結論は以下のとおりである。

- 1) 3名のアイデンティティはそれぞれ大きく異なっており、「ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ」として単純に一般化することはできない。
- 2) 他方、次の共通点が見られた。
 - ① 自分自身とアメリカ本土出身者との違いを認める、もしくは、違いを自覚した経験を持つ。
 - ② 国際的移動に際してアイデンティティクライシスを引き起こしたり、自分のアイデンティティについて悩んだりした経験を持つ。
 - ③ アイデンティティには流動性と複層性が認められる。特に、2次調査を行った1名については、1次調査における語りから様々な変化が認められ、アイデンティティの流動性と複層性が顕著に表れた。

今後、ハワイ日系移民4世・5世を対象とする調査研究を重ねることで、彼らのアイデンティティの正確な把握を目指したい。

人々の国際的な移動が日常化し、日本国内においては外国人労働者の受け入れが進む状況下にあって、移住者やその子孫、あるいは複数の文化にルーツを持つ人々のアイデンティティに寄り添い、理解しようとすることは、望ましい多文化共生社会を創りあげてゆくために必要不可欠である。本論文は、それを意図した小さな試みでもある。

【キーワード】インタビュー調査、多文化共生社会、ハワイアン・クレオール・イングリッシュ(HCE)、複層性、流動性

1. はじめに

1.1 研究の目的と方法

本論文は、ハワイの日系移民4世・5世のアイデンティティがどのような構造を成しているか、また、それが形成された軌跡や要因を明らかにすることを目的とする。

¹ 広島ホームテレビ (県立広島大学人間文化学部国際文化学科・卒業生)

² 県立広島大学人間文化学部国際文化学科・准教授

この目的のために、本論文では、半構造化インタビューによる「質的研究／定性的研究」の方法を用いた。具体的には、以下の手順を踏んだ。

- ① ハワイ出身の日系移民4世・5世の3名を対象に、英語によるインタビューを行う
(SkypeまたはFacebookのMessengerを使用したビデオ通話)
- ② インタビューを文字起こしする
- ③ 日本語訳を付したデータベースを作成する
- ④ データベースの中から調査対象者の日本・アメリカ・ハワイに対する帰属意識やアイデンティティについての語りを抽出し、分析する

なお、④の基となる①から③の作業は2019年4月から12月にかけて断続的に行われた。

1.2 調査対象者

調査対象としたのは、ハワイ出身の日系アメリカ人3名である。現在、日系4世・5世のうち、両親ともに日系である人口は減少している。そのため、調査対象者は父方もしくは母方が日系移民であることを条件とし、両親ともに日系であるとは限らない。以下の表1は3名の調査対象者の基本情報をまとめたものである。

表1 調査対象者の基本情報

	A (2章)	B (3章)	C (4章・5章)
本人の移民世代	4世	父方：5世 母方：3世	4世
1世の移住年代	1897年	父方：1880年代後半 ～90年代後半 母方：1950年代	1921年
本人の出生地	カリフォルニア	ハワイ・ヒロ	ハワイ・ヒロ
本人の生年	1965年生	1996年生	1986年生
本人の性別	女	女	男

表1を見て分かるように、AとCは同じ4世ではあるが20歳以上離れていて、最年長のAと最年少のBの年齢差は30歳を超えている。またAの父親は非日系であるが、BとCは父方・母方の祖父母まですべて日系である(第2章から第4章の各章冒頭に、家系図を含めた3名のプロフィールを記載している)。だから、一口に「日系4世・5世」と言っても、その具体相は実に多様であることに留意する必要がある。

他方、3名に共通することとして、全員がハワイ島外(アメリカ本土または日本)での生活経験を持つ。第2章から第5章で記述されるとおり、ハワイ島外での生活経験は彼らのアイデンティティ形成に大きな影響を与えていて、その意味では、本論文の題目は「ハワイ島外での生活経験を持つハワイ日系移民のアイデンティティ」としても良かったのかもしれない。しかし、1.3に紹介する先行研究のように、従来の移民のアイデンティティに関する研究は世代別の実態・動向を測ろうとしてきたので、研究史を踏まえ、本論文の題目を「ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ」とした。

1.3 先行研究

高木(1992)は、日系移民1世、2世、3世それぞれのハワイでの暮らしや教育、そしてそれらによって構築されたアイデンティティについて主にインタビュー調査に基づいて記す。

1世については、調査時に1世がほとんど存命でなかったため、1世による著述、2次資料、1世についての2世の語りを用いた分析となっている。これによると、1世は1920年代頃までは日本への帰属意識を強く抱いていたが、アメリカ化運動が盛んなハワイにあって、彼らもアメリカ社会に馴染もうと試み、ハワイ生まれの2世にアメリカへの同化を託した。そして、2世には、アメリカ人でありながらも日本や日本の文化を尊重する「日系のアメリカ人」になってほしいという理想像を描いていたという。

2世を対象とした分析は高木自身によるインタビューに基づく。次第にアメリカ社会に馴染んでいった2世だが、日系移民として、差別や不当な待遇に遭うこともあった。そして第2次世界大戦は2世のアイデンティティに大きな影響を与えた。ハワイに住む日系1世・2世の強制収容、真珠湾攻撃、そして、アメリカへの忠誠を誓う専願文の提出、日系アメリカ人部隊の編成などはよく知られた史実である。被調査者の1人は、両親の母国・日本と、自らの国籍であるアメリカとの狭間で悩んだ経験を「戦争になったとき、困ったことだ、と私は思いました。…私には、純粋に日本人の血だけが流れているのです。…でも私はアメリカに生まれたアメリカ人なのです。」(p.97)と語っている。

3世については、帰米2世の子どもとして生まれたフランクリン・オードー(1939年生)と沖縄出身の祖先を持つウェスリー・ウエウンテン(1960年生まれ)の2名に対するインタビューに基づく分析が行われている。

フランクリンの両親は日本で暮らした経験を持つ帰米2世であり、両親の母語は日本語であった。しかし、子どもであるフランクリンには英語による教育を行った。

ウェスリーの家庭では、父親と祖父が広島や沖縄の方言や英語が混ざった日本語で話していたが、ウェスリー自身は日本語を話せなかった。父方の祖父母は日本語で会話し、英語は得意でなかったため、彼らとウェスリーとの会話は困難だった。他方、ウェスリーには母や母方の祖母の話聞くうちに日本人や沖縄人としての意識が芽生えた。また、周囲には日系の他にもたくさんのエスニックの人がいることを認識しており、彼らとはハワイアン・クレオール・イングリッシュ(以下HCE)³で会話をした。

以上のような高木(1992)の記述が、全てのハワイ日系移民1世・2世・3世のアイデンティティの構造、アイデンティティ構築の軌跡・要因の総体を示しているわけではもちろんない。しかし、記されていることは1つの真実であるに違いない。

他方、ハワイ日系移民4世または5世に関する先行研究にはAbe(2011)がある。同論文はハワイ州コナにおける5年間の民族誌的フィールドワークに基づいて書かれた労作で、著者自身もハワイ出身の4世である。論文の主題は、宗教行事や宗教コミュニティとの関わりが各人のエスニシティに関わるアイデンティティの形成にどのような影響を与えているか、というもので、餅つきや鏡餅、服喪期間における肉食忌避の慣習、厄払い、お盆の行事、寺院を中心に展開される太鼓活動、日系仏教徒コミュニティなど、多くの事例が検討されている。

また、Abe(2011)は、家庭内での(多くは祖父母の話す)日本語との接触、あるいは大学における日本語学修の経験が彼らのアイデンティティ形成に果たした影響の大きさについて記述している。これを踏まえ、本論文の調査においても言語環境については特に詳しく尋ねることとし、Abe(2011)

³ HCEとは、19世紀後半にサトウキビ農園の成立とそれに伴う世界中からの移民の移住によりハワイで成立し、現在もなお、現地の人々によって日常的に使用されている言語のことを言う。ハワイでは実際には人々によって「ピジン」と呼ばれ、親しまれている。しかし、言語学における「ピジン」は移民1世の話す混成言語を意味し、それが次の世代に第1言語として受け継がれたとき、それはクレオールと呼称される。このような一般的な言語学用語と区別するため、HCEを「ピジン」と英語で表現する際は“Pidgin”とPが大文字で表記される(Sakoda and Siegel, 2003, p.2)。

が考察した日本語に加え、HCEについても尋ね、分析の対象とした。

この他、近年のハワイ日系移民のアイデンティティに関する先行研究として白水(2015)があるが、同論文の主題はフェスティバルや博物館における集団としてのアイデンティティ表象であり、日系とは異なるオキナワ系移民のアイデンティティが主たる分析の対象とされている点が本論文とは異なっている。

さて、いずれの先行研究も、質的な観察やインタビューに基づいて分析・考察が行われていることに注意したい。そうであるのは、研究対象であるアイデンティティが複雑であり、繊細であるからだろう。本論文が1.1に記した研究方法を採用するのも、同じ理由からである。

1.4 本論文の構成

2章から4章までの3つの章では、A、B、Cの3名について1章ずつを当てて考察を行う。各章において、まず、プロフィールと言語環境を記し(1節)、日系人としてのアイデンティティとその構築要因(2節)、アメリカ人としてのアイデンティティとその構築要因(3節)、ハワイ出身者としてのアイデンティティとその構築要因(4節)の順に記し、最後にまとめの考察を行う(5節)。5章はCに対して行った2次調査の結果とその考察である。この2次調査の目的や1人に対してのみ調査を行った理由については5章の冒頭に記す。6章には本論文のまとめとして全体の考察と今後の課題を記す。

2. Aへのインタビューと分析

2.1 プロフィールと言語環境

Aは母方の曾祖父父母が日系移民1世の日系4世である。父親は白人である。カリフォルニアで誕生し、2歳のときにハワイへ移住した。第1言語は標準英語だと本人は話す。母方の祖父母は明治時代の日本語を話していた。小学校から高校まではハワイの学校に通い、高校卒業後、弁護士を志し、アメリカ本土のロースクールへ進学する。そこで現在の夫と出会い、結婚する。ロースクールの卒業後、英語教師として日本に就職した夫とともに来日し、2年間生活する。その後、夫とハワイ島ヒロへ帰島し、現在は社会人の娘と大学生の息子を持つ2児の母である。娘はアメリカ本土の大学へ進学後、そのまま本土で就職した。息子はスコットランドの大学に通学中であり、卒業後もアメリカ国外での就職を考えている。

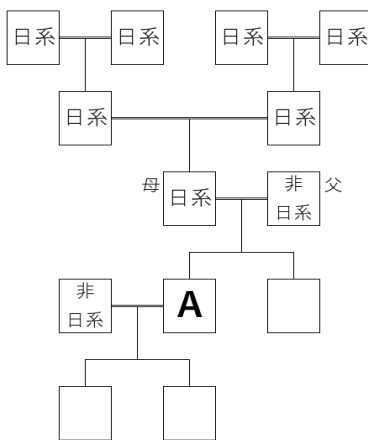


図1 A家の家系図

2歳からハワイで育ったAは、ハワイ出身者との会話ではHCEを使用することもある。日本に住んでいた当時は日本語を少し話せたというが、現在は家族や夫との会話でときに単語を用いるのみである。

2.2 日系人(アジア人)としてのアイデンティティとその構築要因

2.2.1 アメリカ本土学生とのギャップ

アメリカ本土のロースクールに進学したAは、弁護士になるための就職活動のなかで、本土出身の学生と自分たちを含めたアジア人学生の間に差を感じる。以下はその当時についての会話である。

「A」はA、「佐」は佐藤（本論文の第一筆者）の発話であることを示す（「佐」については次章以降も同様）。会話は英語で行われ、以下はそれを佐藤が翻訳したものである。

A：それは1990年代はじめでした。だから何年も前の話ですが、アクセントだけではなく、容姿が…。んー、アジア系アメリカ人はグループになっていました。彼らだけの…インタビューには誰でも参加できたのですがね。アジア系アメリカ人学生は教育課程のすべて、特に弁護士になるための教育や面接ではアジア人として差別されていると感じていました。私たちは謙虚であるようにと教育されますよね。自分のやっていることを自慢しません。私たちは非常に謙虚ですよ。しかし、面接では弁護士としての資格を手にしようとしています。あなたがしたことやあなた自身について素晴らしいことを言わなければなりません。それは私たちにとっては自慢しすぎているように思えるのです。そして多くのアジア系アメリカ人学生はシステムが不平等だと感じていました。

佐：わかりました。あなたは白人とのギャップを感じたのですね。

A：ええ、少し差別のようなものです。今は存在しないと思いますが。だから私の子どもたちにとっては、人種は私の世代のように影響がないはずですよ。しかし、私の世代では影響がありました。

（会話①）

謙虚であることが美德であるという教育を受け、面接で自分自身をアピールすることに抵抗を感じる自分たちに対して、自分の功績やスキルなどについて躊躇せずアピールできるアメリカ本土の学生との間にギャップを感じたという。また、面接においてもアジア人に対する偏見や差別があり、不平等に感じたという。しかし、以上の会話の中であくまで彼女は自分自身を「アジア人」や「アジア系アメリカ人」というカテゴリーの中に置き、「日本人」や「日系人」と表現することはなかった。このことから、Aはアメリカ本土での生活の中で、「日系人」ではなく「アジア人」としての自覚を強めた可能性がある。

2.3 アメリカ人としてのアイデンティティとその構築要因

2.3.1 ハワイ社会におけるマイノリティとしての白人

白人の父親を持つAは、佐藤（本論文の第一筆者）には日系ということが容姿からは分からなかった。その容姿もあってか、幼少期のほとんどを過ごしたハワイでは、白人として周囲に扱われたという。以下はそれに関する語りである。

A：ハワイでは、白人に対して、より差別があると思います。日本人は受け入れられていますが、白人は受け入れられません。私が子どもの頃は、差別を受けていたとしたら、それは日系だからではなく、白人だからです。ハワイには日本人がたくさんいるので。

佐：なにか悪いことを言われましたか？

A：覚えていませんが、あまり白人はいなかったもので、さらに私は100%日本人でもないので、グループに馴染めませんでした。それは友達のせいではありませんが、白人のハーフということが理由でグループに馴染めなかったことも事実です。

佐：分かりました。あなたのご友人やクラスメートが何か悪いことをあなたに言ったというよりは、あなたが感じたことなのですね。

A：はい。でも何も覚えていません。何も起こったことを覚えていません。ただ、何と言ったらい

のでしょう。そのことが私の育ち方に影響を与えたとは思いますが。感じ方など。純日本人でも純白人でもないのです。(会話②)

ハワイで幼少期のほとんどを過ごしたAだったが、その容姿から日本人のグループには馴染めず、孤独だったと話す。日本人や日系人がマジョリティとなっているハワイ社会の中で、Aはそれに属するはずの日系人であるにもかかわらず日系人と周囲にみなされず、差別さえ感じた。会話①の語りの中で自分自身を日本人とカテゴライズしなかった背景には、幼少期のこういった経験の影響もあるのではないかと推察される。彼女のアメリカ人としてのアイデンティティは、後に大学で大きく変化することとなるが、ハワイで暮らしていた幼少期には特に白人やアメリカ人としての自覚が強かったことが考えられる。

佐：学校での言語環境について小学校から教えてください。

A：ハワイでは、人々は英語を話しますが、みんなピジンも話します。13歳になるまで、全て基本的に英語が使用されますが、周りのみんながピジンも話します。だから、ピジンも話せるようになります。

佐：中学校・高校も同様ですか？

A：私の場合は違いました。私は全寮制の学校に行ったので。(中略)なので、様々な国や州から来た人々が大勢いました。そのため、常に標準英語⁴を話さなければならなかったです。全て正しい英語です。(会話③)

学校では標準英語が教育に用いられていたものの、ハワイで暮らしていると周囲の影響により自然とHCEも身に付けるといえる。しかし、中学校から全寮制の学校に通ったAはそんなハワイ社会の中でも中学以降はHCEにあまり触れない生活を送っていた。様々な国の出身者に囲まれた環境でいつも標準英語を話していたという自分自身と一般的なハワイの人々を区別して話していることから、彼女のアメリカ人としての意識の強さが窺える。

2.4 ハワイ出身者としてのアイデンティティとその構築要因

2.4.1 ハワイ訛りの英語

会話①でも話していたように、Aはロースクールでの学生時代、アメリカ本土の学生との間にギャップを感じた経験を持つ。以下は、直接的に指摘を受け、自分がハワイ出身者であるということを実感した経験について語る場面の抜粋である。

佐：ピジンに対して否定的な考えはありますか？

A：いいえ。でも、私がカリフォルニアのロースクールを卒業するとき、就職のための面接がありました。そのため、学校の誰かと面接練習をしていました。そして彼らが批判的でした。なぜなら、ピジンを話していないときでも、んー、ピジンは何か言うとき、ときに音を上げるのです。

佐：なるほど。文章の終わりなど。

A：ええ、上がります。そしてこれは標準ではありません。なので、彼らは私に訛りがあると言って、弁護士のための面接のときは正すべきだと言いました。私は正しい英語を話していたので、私に

⁴ “Standard English” と本人は話す。HCEやHCEに影響を受けた英語に対して、アメリカ本土の英語を意味する。

訛りがあるとは知りませんでした。しかし、適切な英語を話しているにもかかわらず、彼らは私に訛りがあると分かったのです。でもそれは弁護士としての職を手にするためのインタビューだったので、非常に堅いシチュエーションでした。

佐：それに対してどう感じましたか？ 腹が立ちましたか？

A：はい。(会話④)

カリフォルニアで生まれ、白人の父を持つAはインタビューの冒頭で自身の第1言語は標準英語だと回答した。また、彼女は普段HCEを話していないという自覚を持っていた。しかし、面接練習という堅い場面でスタンダードな英語を話していた(つもりであった)にもかかわらず、アメリカ本土の人々が話す英語との差を指摘される。幼少期のほとんどをハワイで過ごし、多かれ少なかれHCEに触れて育った彼女には、文法など基礎的な部分では標準英語を話しているときでも、気づかぬうちに独特なHCEのアクセントが出てしまったのだろう。ハワイでは白人とみなされ区別された彼女は、このとき初めて自分にハワイ独特の訛りがあると気づき、またしても区別されてしまう。

2.5 考察

Aは、日系人が多数存在し、白人がマイノリティとされるハワイでは白人とみなされ、グループに馴染めなかった。アジア人がマイノリティであり、白人がマジョリティであるアメリカ本土では、話す言葉の訛りを指摘され、アメリカ本土出身者との違いを感じた。幼少期のほとんどを過ごしたハワイも、生誕地であるアメリカ本土も、彼女にとって自分のルーツがある重要な地であることは疑いない。そのような地であっても、白人と日本人の両方の血を受け継ぐAは、それゆえにマイノリティの立場になり、周囲とのギャップを感じたり、グループに馴染めなかったりした。「純日本人でも純白人でもない」という彼女の発言は単純に人種的な意味だけではなく、こういった経験を背景として築き上げられたアイデンティティについての発言でもあったと考えられる。自らのアイデンティティが複数の社会に属する彼女は、自分自身をどのように認識し、どのように周囲に紹介するのだろうか。

佐：国籍を尋ねられたとき何と答えますか？

A：時と場合によりますが、よく日系白人と答えていました。もしくは…この単語をご存知か分かりませんが…誰が尋ねているかによります。ここハワイで尋ねられたとすれば、“Hapa”という単語があります。ハーフという意味です。私はハーフ・ハーフなのです。この単語はふつう、日本人となにかのハーフという意味です。(会話⑤)

誰に尋ねられたかによって回答を変えるそうだが、誰かに自分を説明するとき、「白人と日本人のハーフ」と答えるという。彼女は自身のルーツがある社会でその地の人々とのギャップを感じたり、指摘されたり、ときに差別を受けたりした。それに対し、腹を立て、平等でないと感じた経験もある。

国際結婚や移住など、国境を越えた移動がごく一般的である現代、Aのように自分自身を複数の国や地域で表現することはごく自然なことであり、より社会がそれに対し受容的になることが望まれよう。

3. Bへのインタビューと分析

3.1 プロフィールと言語環境

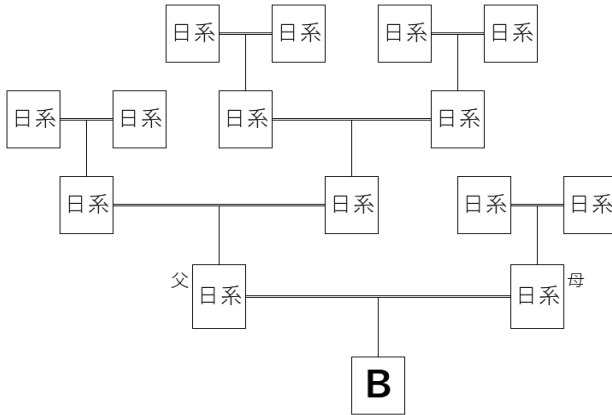


図2 B家の家系図

Bは父方では5世、母方では3世の日系アメリカ人である。父方の1世は1880年代後半～1890年代前半にハワイへ移住した。4世である父親は日本語を全く話さず、Bは父親と標準英語で会話する。

母方の祖母は1950年頃ハワイへ移住した。祖母は若くして夫を亡くしたこともあり、極めて貧しかった。戦後まもなくではあったが、困窮した暮らしから抜け出すため、ハワイへの移住を決意した。ハワイではマカダミアナッツ農園で働いて生計を立てた。

2世であるBの母親の幼少期の生活水準はまだ低く、彼女は自分自身の衣服を自分で縫わなければならないほどだった。大学はアメリカ本土へ進学する経済的余裕がなかったため、ハワイ大学マノア校へ進学した。以前は母親（Bの祖母）と日本語で会話していたが、現在の家庭での使用言語は英語であり、日本語使用が少なくなったことにより、現在はあまり話すことができない。

B本人は、高校までをハワイ島ヒロで過ごし、高校卒業後、アメリカ本土の大学へ進学した。現在は、大学院に進学するため、ワシントンで就業経験を積んでいる。

3.2 日系人としてのアイデンティティとその構築要因

3.2.1 日本人としての自覚

父方と母方の両方が日系であるBは日本人としてのアイデンティティをどのように自覚しているのだろうか。以下は、直接的なアイデンティティについての問いに対する彼女の回答である。

佐：ハワイ出身者、日本人、アメリカ人のアイデンティティがあなたの中にあるとしましょう。どのアイデンティティが最も重要ですか？

B：日本人だと思います。なぜなら、それが私のエスニシティであり、私が育ったメインの文化の1つだからです。

佐：次には何が来ますか？

B：エスニシティ的には私はハワイアンだとはいいません。しかし、文化的な意味では、私の第2の文化的なアイデンティティはハワイだと答えるでしょう。私が育てられた価値観やハワイの文化は大いに現在の私に影響を与えているからです。そして、それからアメリカ人でしょう。しかし、今までアメリカ人と自覚することがなかったので分かりませんが。(会話⑥)

質問に対する回答の速さからも日本人としての自覚が強いことが伺えた。また、それは父方・母方ともに日本人であり、人種としては純日本人であることを理由に挙げている。

佐：あなたは日本への帰属意識が強くあるんですね。

B：ええ。そしてそれはほとんど母方の影響だと思います。それは、今の私の人生を築き上げるために彼らが乗り越えなければならなかった困難についての話をよく知っているからです。彼らは私の人生をほとんど完全に360度変えてくれました。よりよい生活を求めてハワイに移住したものの私の祖父母は非常に貧しかったからです。(会話⑦)

3.2.2 大学での多様性に関するオリエンテーション

日本人としてのアイデンティティの構築要因として、人種という先天的な事由のほかに、Bの大学での経験も影響を与えた。以下は、白人学生が多数を占めるアメリカ本土の大学に進学したBが体験したことに関する語りである。

佐：アメリカ本土で日本人として生きていて困難はありましたか？

B：私の大学は白人学生の割合が多い大学でした。大学1年生のときには、ほとんど私は今までの人生の中でマジョリティの立場だったので、気付いたり、何か感じたりしませんでした。なので、私は肌の色や自分の人種が他の人からの私の評価に影響を与える、もしくは定義づける材料であると考えたことがありませんでした。(中略)しかし、オリエンテーションリーダーを務めた際にあることが起きました。大学2年生のときで、私たちは多様性サミットということをしなければなりません。(中略)そのワークショップでは、ペアを作って私のような人々をどう扱うかを教えるのです。私は母に電話して、「待って、私たちはマイノリティなの？」と聞いたことを覚えています。彼女は私に、決して人種のせいでは皆ができることができないなどといった思いをさせたくなかったと話しました。それと同時に、それが周囲の私たちを見る目だと。それは私が悪いわけではないけれど、社会の構造として、周囲と違う容姿の人は酷い扱いを受けたり、低い地位にされたりするのだと。私は信じていませんが。それは大きな出来事でした。それが私の日本人としてのアイデンティティが最も強く、次にハワイ出身者だと自覚する理由です。私は明らかにアメリカ人であり、それが私の市民権ですが、アメリカで起こることに対して自分自身の繋がりを感ぜません。(会話⑧)

大学2年時のオリエンテーションでのこの経験を彼女が「大きな出来事だった(That was a big thing.)」と繰り返し言ったことは印象的である。岩崎(2018)は「自己のアイデンティティが意識されたり問題となったりするのは、それまでは当然の如く受け止め安定していると思われたアイデンティティが、何らかの衝突や矛盾で揺らぐ時である」(p.17)と記している。Bはハワイからアメリカ本土への移動によって、アイデンティティが揺らぎ、覆された。“That was a big thing.”という彼女の言葉から、この出来事が彼女のアイデンティティに大きな影響を与えたことは間違いない。

この大学2年時の経験は、ハワイの外では自分はマイノリティになり得るという自覚を生み、Bは「他人に自分がどう見えているか」ということを意識するようになった。Bの日本人としてのアイデンティティは彼女のエスニシティやルーツだけでなく、周囲が自分を見るまなざしやそれに対する彼女の意識が影響を与えて構築されている。

3.3 アメリカ人としてのアイデンティティとその構築要因

3.3.1 アメリカへの帰属意識

会話⑧において、Bは自分がアメリカ人だと認めながらも、自分のアイデンティティは日本人やハワイ出身者としてのものが重要であり、アメリカでの出来事に対しても「自分自身に関連しているとは感じていない」と話している。また、調査中の語りの中で彼女のアメリカ人としての自覚やアイデンティティが窺えるものはなかった。これは彼女のアメリカに対する帰属意識が低いことの表れであると推測できる。

3.4 ハワイ出身者としてのアイデンティティとその構築要因

本節では、Bが会話⑥で日本人の次に重要だと答えたハワイ出身者としてのアイデンティティについての語りについて分析する。

3.4.1 アメリカ本土出身者との違い

以下は自分自身を含めたハワイ出身者とアメリカ本土出身者の違いについて尋ねた際の発言である。

B：大学のとき、ハワイ出身の友人とそれ以外の友人の違いを時々感じていました。それは家族の在り方やどれだけ家族を優先させるかなどといったことです。ほとんど全員のハワイ出身の友人は…私たちは非常に幼いときから人々にアロハの心をもって接するように教えられています。アロハとは敬意や愛のことで、アメリカ本土出身の友人は敬意が欠けているということではないですが、ただ人々の扱い方の考え方がとても違うのです。例えば、私たちは（受け取るよりも）「与える」ように教わります。（会話⑨）

この発言から、Bが人種的ではなく、文化的にアメリカ本土出身者との差異を認識していることがわかる。現在でも地元の人々に親しまれているハワイ語の「アロハ」を用いながら話していることから、ハワイの文化や価値観はアメリカ本土の人々とは異なり、ハワイ特有のものであると認識していることが窺える。

佐：いつかハワイに戻りたいと思いますか？

B：そう思います。少なくとも、私にとってハワイで育ったことに対するプライドを認めますし、今の私の大きな割合を占めるという意味で文化的な影響も受けたと思います。（中略）なので、いつか帰る機会があればと思います。母方と父方どちらの家族もハワイにいますし、子どもにも同じ機会や文化的影響を持ってほしいからです。しかし同時に、アメリカ本土にいて感じますが、ハワイは太平洋の真ん中に位置する小さな島なので、明らかに本土出身の友人にはあって私にはなかった機会があります。（中略）私が帰ることについて心配なのは雇用の機会があるかということです。なので、分かりませんが、私が帰るか帰らないかという決断に際して考えることがたくさんあるのです。でも本当に帰りたいとは思っています。（会話⑩）

「ハワイ出身者としてのプライドがある」とハワイへの強い愛着を語りながらも、アメリカ本土ほどハワイには雇用や経験等社会的機会がないことを認め、帰郷することに対しては葛藤のあることが分かる。「本土出身の友人にはあって私にはなかった機会がある」という語りからは、彼女の、ハワイ出身ということに対する劣等感のようなものが感じられた。

3.5 考察

調査対象者3名のうち、調査時にはBだけがハワイの外、アメリカ本土のワシントンで暮らしていた。インタビュー調査によって、彼女はアメリカ本土社会にしっかりと溶け込みながらも、日本やハワイへの帰属意識を強く持つことが分かった。一方で日本・ハワイに比較したアメリカに対する帰属意識の低さやそれを自覚していることも明らかとなった。三宅(2018)は、Liu-Farrer(2012)を参照しながら、「ホスト国で人種的にも社会階層的にも低くみなされがちな移民は、出身国への帰属意識を高めていく傾向がある」(p.137)と記す。Bが自分にとって最も重要だと話した日本人としてのアイデンティティは、父方・母方共に日系であるというBのエスニシティだけでなく、**会話⑧**の中で語られたようなアメリカ本土での経験も要因となって構築されているのだろう。また、ハワイに対する帰属意識の強さも同様のことが言える。本論文の第一筆者(佐藤)はハワイへの留学中、「ハワイはアメリカではない」と多くの地元の人々が口にしての言葉を頻りに耳にした。**会話⑧**で語られたアメリカ本土社会への帰属意識の低さや、**会話⑨**に見られるアメリカ本土出身者とハワイ出身者の違いに関する認識は、彼女のアメリカ本土社会とハワイ社会の区別によるもので、佐藤がハワイ留学中に耳にした認識と同様の認識がBにもあると推測できる。同じ国でありながら、アメリカ本土での生活は、日本への帰属意識同様、彼女のハワイへの帰属意識も強めた可能性がある。また、**会話⑩**からはBのハワイ出身であることに対する誇りと劣等感という相反する感情が垣間見えたが、これは、アメリカ本土社会で感じた社会的機会の不平等さが直接的に彼女の劣等感の原因となる一方で、三宅(2018)の指摘どおり、反対に地元ハワイへの愛着を強めていると考えることができるだろう。

4. Cへのインタビューと分析

4.1 プロフィールと言語環境

Cは沖縄系の日系4世である。父方の1世は1921年に沖縄からサトウキビ農園で働くため、ハワイ島へ移住した。父親はホノムウという小さな町のサトウキビ畑で生まれ育った。父親は日本人の家庭に生まれたが、日本語をほとんど話さず、両親(Cの祖父母)とはHCEで会話をする。Cの母親は日本で生まれたが、3歳のとき、日本を訪れていたハワイ在住の日本人夫婦に引き取られ、彼らのもとで養子として育った。幼くして日本を離れたため、現在は日本語を話さない。そんな両親の元に生まれたCは、幼い頃からHCEや英語を耳にして育ち、日本語を話すことはできなかった。日本語とは、1世であるCの母方の祖母とのコミュニケーション時に接触していた。彼女は日本語しか話さなかったため、幼い頃Cは祖母とのコミュニケーションが困難だった。母方の祖母と父方の祖父母は日本語話者であったが、拙いHCEを用いてCとコミュニケーションを図った。

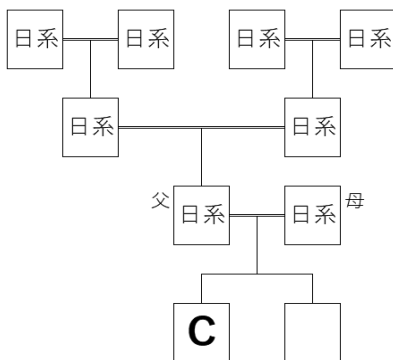


図3 C家の家系図

Cは1991年から2009年までの間、小学校から大学までハワイ島ヒロの学校に通う。学校ではほとんどHCEは使用されず、標準英語が使用されたという。また、英語の教師はほとんどがアメリカ本土出身であった。

大学進学後、Cは日本語学習を開始する。ハワイ大学在学中の2005年~2006年には10か月間、東京の大学への留学を経験した。その後、日本語能力を身に付け留学から帰国すると、Cは母方と父方の祖母と日本語で会話をするようになる。そしてハワイ大学を卒業後、再び来日し、同じ東京の大学および同大学

院へと進学した。大学院修了時には、ハワイにおける日本語について、日本語で修士論文を執筆している。

その後、英会話講師や都内の別の大学の専任講師として働き、2018年、ハワイ島ヒロへ帰郷する。現在は、母親と暮らしており、ヒロの不動産会社で働きながら、週末は地元の少年サッカーチームのコーチを務めている。

4.2 日系人としてのアイデンティティとその構築要因

4.2.1 日系人としての自覚

以下の2つの発言から、Cが日本に対して非常に強い帰属意識を抱いていることが伺える。

佐：仮にハワイのローカル、アメリカ人、日本人、沖縄出身者のアイデンティティがあるとしましょう。どのアイデンティティが最も主要ですか？

C：日本人ですかね。あ、日系アメリカ人。(略)ハワイのロコという自覚はありません。でも日本の文化と深い繋がりを感じます。だから自分自身を日系アメリカ人と呼ぶのだと思います。(会話⑩)

佐：パーセンテージを言うならばどういった割合になりますか？ アメリカ人と日本人です。

C：80%日本人、20%アメリカ人です。(会話⑪)

会話⑫の語りや、会話⑩における「ハワイのロコという自覚はない」という発言から、アメリカ人やハワイのローカルと比較して、日本人としてのアイデンティティを強く自覚していることが分かる。

4.2.2 祖父母の影響

Cのアイデンティティに大きく影響を与えていると考えられる日本とのつながりや、日系人としての意識はどのように形成されたのだろうか。

佐：日本に興味を持つようになったきっかけは何だったのですか？

C：幼いときの祖父母の影響です。母方の祖母、彼女はまだ生きていますが、彼女は日本語しか話しません。彼女がハワイで日本のテレビ番組をよく見ていて、私もそれを一緒に見ていました。(中略)日本の音楽に本当にハマりました。中学校のとき、たぶん11・12歳のときです。ハワイでモーニング娘。を見て、私は「めっちゃいいな」と思ったのです。こんな感じで日本に興味を持つようになりました。(中略)サッカーにも大きな影響を与えられました。中田英寿とか。私は日本でサッカーをしたかったのです。それがモチベーションのようなものでした。(会話⑬)

以上のとおり、日本語しか話さない祖父母の存在が日本との繋がりを感じるきっかけであった。また、幼少期の日本文化への興味が日本自体への興味に繋がったことが分かる。

4.2.3 日本での10年間

佐：あなたは強く日本への帰属意識があるんですね。

C：ええ、非常に強く。特に日本に住んで以降は。(会話⑭)

会話⑭で自ら「特に日本で住んで以降は」と話していることから、日本での10年間の生活がCの帰属意識の自覚に大きな影響を与えたことが分かる。

C：私はアメリカより日本に住んでいるほうが快適なのです。

佐：なぜですか？ 人ですか？

C：そうだと思います。人、単純に触れ合い方だと思います。

佐：人と人との距離はどう思いますか？

(中略)

C：日本人は距離の取り方がとても上手いと思います。特に、少し物理的な距離、個人的領域をキープしているところです。単語や仕草を使うのが非常に上手で、そして、とても礼儀正しいです。

(会話⑮)

会話⑮では、日本人のコミュニケーション方法について話している。Cは日本で暮らすほうがアメリカで暮らすより快適である語り、その理由として日本人の対人距離やコミュニケーション方法を挙げている。これらも、Cが日本に帰属意識を持つ1つの要因となっている。

4.3 アメリカ人としてのアイデンティティとその構築要因

4.3.1 アメリカ人としてのアイデンティティ-父親との比較

佐：3世と4世の違いは感じますか？ あなた自身とお父さんとの間にアイデンティティの違いはありますか？

C：アイデンティティは違うと思います。(中略)彼のアイデンティティはとてもハワイのローカルだと思います。ローカル…彼はいつもピジンを話しますし。でも私のアイデンティティは彼よりも少しアメリカ人だと感じます。単純にどこで育ったかや、教育、話す言葉、標準的なアメリカ英語を話すことが理由です。(会話⑯)

会話⑯において、Cは自身のアイデンティティが父親と比較して、よりアメリカ人であると話している。その理由として、Cは父親が主にHCEを話すこと、そして自分がアメリカ本土の人々が話すような標準英語を話すことを挙げている。このことから、言語使用や言語能力が自分自身や他人のアイデンティティの認識の基準となっていることが分かる。Cから見て、いつもHCEを話す父親は非常にハワイ出身者らしいハワイ出身者であり、スタンダードな英語を話す自分はハワイの人間というよりは、むしろアメリカ人なのである。

また、ハワイ出身者らしいハワイ出身者を父親に持つことで、彼と自分自身を比較したとき、自分は彼よりアメリカ人らしいという意識が芽生え、アメリカ人としての認識が強まったのではないかと考えられる。

4.3.2 教育の影響・HCEの制限

会話⑯において、アメリカ人としてのアイデンティティ形成の要因は教育と言語だと話したCは、受けた教育や言語環境について次のように語っている。

佐：あなたのアイデンティティがハワイよりアメリカ寄りである理由を説明できますか？

C：教育の影響だと思います。大いに。確かに私たちはハワイの歴史などについてもたくさん学びました。しかし、それ以上にアメリカの歴史、標準的なアメリカ英語を学びました。(会話⑰)

アメリカ人としての意識がハワイ人としての意識よりも強いこと理由として、教育を挙げている。授業の内容がハワイに関するものよりアメリカに関するもののほうが多かったこと、さらに使用言語が標準英語であったことがアメリカ人としての自覚を強めたという。

佐：今まで学校でピジンの使用を禁止されたことがありますか？

C：(前略)母が正しく話させる方針だったことを覚えています。学校の先生も同様でした。標準英語を学ぶよう言われました。(会話⑱)

この発言から、母親・学校ともにHCEではなくアメリカ本土の人々が話すようなスタンダードな英語をCに習得させようとしていたことが分かる。実際に現在もなおハワイ社会において人々に多く使用され、ハワイの文化とも呼ぶべきHCEが教育の場で使用を制限されたのはどういうわけか。その理由について、Homberger and Lee Mckay eds. (2010, p.240) からHCEに対して否定的立場をとっている人物の発言を引用する。

- ・“Pidgin ranks right up there with ebonics. It’s broken English. And when something is broken, you fix it.” – 「ピジン (HCE) は黒人英語と同じほどの価値であり、それはブローケン・イングリッシュだ。なにかが乱れたとき、(言語も同様に) 直さなければならない。」(Bulletin, 1999, Honolulu Star新聞より)
- ・“For the benefit of Hawai’i children, Pidgin should become a thing of the past... There are some things that deserve to die.” – 「ハワイの子供たちのためにピジンは過去のものとなるべきだ。消滅しても仕方のないものもある。」(Honolulu新聞, 2002)

これらがハワイ出身者によって発されたものかどうかは不明である。しかし、これらの発言が新聞に掲載されていることから、少なくとも、当時HCEに対する否定的な見方がハワイに存在したことは確かである。Cがハワイで教育を受けたのは1991年から2009年であり、時期は重なっている。

また、Yokota (2008, p.29) によると、1920年代から40年代の教育者も標準的な英語の習得が成功の鍵であると主張しており、保護者は子どもたちに標準英語を身につけさせようとしたという。

インタビュー中、Cは“Speak proper”という表現を用い、アメリカ本土の人々が話すような標準的な英語がProper (適当) であるという認識を持っていた。さらに、C自身もスタンダードな英語の習得を促されることについて疑問を持たなかったことから、標準英語＝正しいという認識がCの周辺では一般的であったことがわかる。ハワイ独特のHCEではなく、アメリカ本土の人々と同様の英語を話すように、という教育を受けたCがアメリカ人としてのアイデンティティを強めたのは自然なこと

であったろう。

4.4 ハワイ出身者としてのアイデンティティとその構築要因

4.4.1 ハワイ出身者とアメリカ本土の人々

会話⑱においてCはハワイ出身者としての自覚はないと断言している。しかし、ハワイはCの生まれ育った土地であり、多かれ少なかれアイデンティティに影響を与えているはずである。以下、出身地であり現住地でもあるハワイに対する帰属意識が表れていると言える発言を引用する。

佐：今までアメリカ本土のアメリカ人と違いを感じたことはありますか？

C：あります。

佐：いつですか？

C：頻繁にです。(中略)例えばハワイでは、私たちは、あなたも住んでいたときに感じたかもしれないけど、地元の人の大勢はジョークを言ったりします。もっと古き良き風潮があります。オープンで、それであってときに直接的に物事を言う。(中略)でも本土の人はそれを理解しがたいのではないかと思います。私たちの表現の仕方、特定の感情など... (会話⑲)

ここでは、アメリカ本土のアメリカ人とハワイの人々の違いを話している。ここでCは「ハワイの人々」を意味する部分で“we”(私たち)という単語を使用していることから、この語りの中でCはハワイ出身者の立場をとって発言している。そして「ハワイ出身者のコミュニケーション方法をアメリカ本土のアメリカ人は理解しがたい」という発言から、自分を含めたハワイ出身者とアメリカ本土の人々を区別していることが分かる。

4.4.2 言語環境とHCEの影響

ハワイで生まれ、育つ中で、Cのアイデンティティ形成にハワイ社会はどのように、またどのような影響を与えたのか。このことについてCは言語環境を挙げる。

佐：あなたのお母さんはあなたにスタンダードな英語で話しかけていましたか？

C：そうしようとしていましたが、ピジンを結局話していました。(会話⑳)

佐：どうやってピジンを習ったのですか？ ただ自然にご両親からですか？

C：親、友達、環境ですね。

佐：ハワイに住んでいると店などで頻繁にピジンに触れるということですね。

C：ええ、店、レストラン、ときに仕事でも。(会話㉑)

教育熱心でありHCEに対して教育の観点からは否定的な立場をとっていたと考えられる母親でさえ、ときに誤ってHCEでCに話しかけていたとCは述べている。また、教わらずとも習得してしまうほど、ハワイで生活をしているとHCEに触れる機会が多い。この、たとえ排除しようとしてもできないほどハワイ社会に強く根付くHCEの存在は、アメリカ人としての自覚の強い若い世代にもハワイ出身者としてのアイデンティティをもたらしている要因であると考えられる。

4.5 考察

Cは、自分はハワイ出身者というよりむしろアメリカ人としてのアイデンティティの方が強いと話した。また、父親と自分を比較して、父親は自分よりハワイ出身者としてのアイデンティティが強いとも語った。その理由として挙げたのが、言語使用、言語能力、言語環境であった。「HCEを話すから父親はハワイ出身者としてのアイデンティティが強い」や「標準英語で教育を受け、実際に標準英語を話すため、自分はアメリカ人としてのアイデンティティが強い」など、Cにとって自分自身や他人のアイデンティティを認識する基準は言語であった。

他方、インタビュー中、Cがハワイ出身者としての自覚を否定する一方で、ハワイ出身者の立場から発言する場面があった。岩崎（2018, p.16）は、「アイデンティティは多様で動的かつ流動的で矛盾をも内包する」と記す。Cの発言には、岩崎の指摘のとおり、彼のアイデンティティの複層性と流動性を読み取ることができる。

アイデンティティの自覚は常に変化しうるものであるため、容易には同定できない。さらに、回答や発言は全てCの自覚の範囲のものであり、自覚していないレベルにおいて、アイデンティティはさらに複雑な構造を成している可能性もある。今回、Cはアイデンティティに関する直接的な質問に対してはハワイ出身者としての自覚を否定し、それとは別の質問に答える中でハワイ出身者の立場をとっている。このことから、無意識のレベルのアイデンティティを明らかにするためには、直接的なアイデンティティに関する質問だけでなく、様々な角度から重ねて質問をすることが効果的だと分かる。

5. Cに対する2次調査

5.1 調査の目的

本章ではCに対する2次調査について記述する。岩崎（2018, p.17）は留学生のアイデンティティに関する先行研究を整理する中で、「多数の学生を一括りにし定量分析によって結果を一般化することより、むしろ少数の個人の長期的変化を追うケーススタディの価値が見直されてきた（Jackson, 2017）」と記す。複層性と流動性を持つアイデンティティの実態は多様かつ複雑である。本研究が量的調査ではなく質的調査を用いたのもその為である。

A、B、Cに対する1次調査の分析（2章から4章）から、この3名のアイデンティティにも複層性と流動性が確認された。このことは、彼らのアイデンティティを明らかにするには1度の調査では不十分である可能性を示唆している。そこで、1次調査において矛盾を内包した語りがあり、3名のうち特にアイデンティティの複層性が見られたCを対象として2次調査を実施することにした。

この2次調査は、Cのアイデンティティをより詳細に記述し、分析するという目的に加え、3名に対する1次調査の妥当性を検証するという目的を持って実施された。

5.2 2次調査で語られたこと

5.2.1 日本留学でのアイデンティティクライシス

2次調査では主にCが経験したアイデンティティクライシスについて話してもらった。まず、彼が人生で初めて直面したという1度目の留学時の経験についての語りを抽出する。

佐：今まで自分は何者かと悩んだことはありますか？ アイデンティティクライシスのようなものを経験したことがありますか？

C：何度かアイデンティティクライシスを経験したことがあります。2005年から2006年に日本に初めて留学したときが最初の経験です。見た目は日本人であるにもかかわらず日本語が話せなかったため、本当に自分がどこに属しているのかわかりませんでした。(中略) 大勢の日本人が私に、私は日本人ではないと言ってきたことは覚えています。

(中略)

佐：彼らは意地悪なことだと自覚してそれを言っていたと思いますか？

C：明らかではありません。分かりません。

佐：それに関してとても不快だったのですね。

C：んー。初めはあまり気にしていなかったのですが、たくさんの人が言うので…。だから私は毎回日系アメリカ人だと言わなければなりません。そして、彼らはブラジル出身かと私に聞いてきました。ブラジルには日系移民が大勢いるので。(会話⑳)

彼に「日本人ではない」と言った日本人が不快な思いをさせることを意図してそう発言したかは不確かであり、C自身もそれに対して初めは気にかけていなかった。しかし、そのように発言する人のあまりの多さから、人種的には日本人である自分のアイデンティティについて疑問視するようになったのだろう。Cにとって自分自身や他人のアイデンティティを認識する基準は言語であった(4.5)。日本語が話せないために、大勢の日本人から「日本人ではない」と言われ、初めてアイデンティティクライシスに陥ったこの経験が、そのような認識を持つに至ったきっかけであったのかもしれない。

5.2.2 2度目のアイデンティティクライシスー日本での就職後

Cは、大学院生として過ごした2度目の留学中、日本での生活には特に問題がなかったと話した。しかし、その後、日本で社会人として働くようになり、Cは再びアイデンティティクライシスを経験したという。

C：2013年から2015年にかけて、日本社会に所属しようと調整することが困難でした。日系アメリカ人であることや英語と日本語のバイリンガルであることは得することなのですが、大勢の人々が私の能力から利益を得ようとしました。なので、同僚を信じるのを辞めてほとんど一人で働くようになりました。

佐：日本人がどのようにあなたのスキルを利用しようとするかわかる気がします。

C：外資系の会社に勤めていたので日本人だけではありません。ですから日本人社員も外国人社員も大勢いました。日本語しか話せない人や英語しか話せない人がいました。(中略) 私はほかの人より2倍の量の仕事がありました。

佐：あなたは、ほかの人よりたくさんの仕事があることに腹が立ちましたか？ それとも利用されることに腹が立ちましたか？

チ：ええっと、人々が私を使うことに対して、よりイライラしたし、怒っていたのだと思います。それは私が日本を離れるまで、なので2013年から2018年まで続きました。(会話㉓)

彼は大学院修了時には日本語で修士論文を執筆しており、会社に入社したときにはすでに高い日本語能力を持っていた。会社員になったとき、英語の母語話者であり日本語が堪能であることに加えて、有能で勤勉な彼は仕事仲間にとっても会社にとっても必要な存在だったと想像できる。そのために仕事が増え、利用されていると感じ、彼は苦痛を覚えた。1度目のアイデンティティクライシスで

は、日本語能力の乏しさから困難に陥った。しかし、2度目のアイデンティティクライシスで彼は皮肉にも日本語能力の高さから苦痛を感じている。

5.2.3 日本人との違いー建前という文化

日本での生活の中で、ハワイ出身の彼は日本人と自分自身の間に差異を見出した。以下は、建前を使う日本人に関しての語りである。

佐：日本にいるとき、日本人とあなた自身の違いを感じたことはありますか？

C：はい。日本人は建前を多く使います。

(中略)

佐：あなたは彼らの本心が分かりませんでしたか？

C：んー、彼らがたとえ言わなくても何を言おうとしているか分かっていました。しかし、ときには私は「口に出したらどうだ。」とっていました。

佐：それはあなたにとってストレスでしたか？

C：ええ。私が「どういう意味ですか？」と尋ねたとき、彼らは「あなたは日本人だから理解するべきだ」と言いました。ときにです。そしてまたあるときには、「ああ、あなたは日本人ではないから理解できないのだ」と言いました。(会話⑳)

Cは日本人の本心を理解できていた一方で、日本人の回りくどさに苛立ちを覚えていた。さらに、発言の意図を理解できず、本人に尋ねると、ときに「日本人なのに」と言われ、ときに「日本人でないから」と言われたという。こういった言葉を投げかけられたCが周囲に不信感を抱くことは容易に想像できる。祖父母の存在や幼少期の日本文化への興味などによって彼が来日以前に築き上げた日本人としての強いアイデンティティは、こういった経験によって大きく揺らぎ、アイデンティティクライシスの原因となったのだろう。一方で、一次調査の会話㉑でCは日本人のコミュニケーション方法や人との距離の取り方を理由として挙げ、「日本で暮らすほうが快適」と話している。日本で生活しているときにはハワイ育ちの自分と日本人の間に差異を見出し、それを苦痛に感じたが、10年間という長い日本での生活の中でC自身が日本社会に適合するため、コミュニケーション方法を意識的もしくは無意識的に変化させた可能性は十分に考えられる。10年間の日本生活によってCの価値観は変化した。ハワイへ帰島した現在、彼は地元ハワイの人々と自分との間にコミュニケーション方法や価値観においてギャップを感じている。会話㉒でのCの発言は、こうした経緯を背景に語られたのだと解釈される。

5.2.4 アメリカ本土出身者との違い

一次調査においてCは日本人の次にアメリカ人としてのアイデンティティが重要だと話した(会話㉓・㉔)。そして以下では、アメリカ人としての自覚を持ちながらも、アメリカ本土のアメリカ人との違いについて語っている。

佐：あなた自身とアメリカ本土の人々との違いを感じますか？

C：ええ。本土の人々はもっと自己中心的だと思います。不動産の仕事やサッカーのコーチ、教員をやって、本土出身の人々と頻りに触れ合います。私の経験では、本土出身の人々は他人をサポートしようとするより、自分自身の利益を優先します。(会話㉕)

この発言から、Cがアメリカ本土出身者との関わり合いの中で、彼らに対してネガティブなイメージを抱いていることが窺える。また、同様の質問に対して、他の2名の調査協力者(AとB)は、アメリカ本土でマイノリティとして暮らす中で差異を自覚したと語ったが、Cの場合、ハワイ社会でのアメリカ本土出身者との関わり合いの中で差異を感じている。自分自身がマイノリティでない状況下、さらに、様々なエスニックグループが共生しているハワイで、本土出身者に対して感じるギャップや不満は彼にとって大きなものである。Cはアメリカ本土出身者との関わり合いの中で、現在も彼らに不満を抱いており、自分自身とアメリカ本土出身者を区別している。

5.2.5 自分の居場所とは

Cは10年間の日本生活を終え、現在ハワイで生活している。以下は、日本を離れるときから現在も直面しているというアイデンティティクライシスについて語った場面である。

C: 2018年から今まで、少しアイデンティティクライシスに陥っています。10年間日本にいた後、ハワイには属していると感じません。(中略) 日本では人々が私を利用してはいえ、私のすることに対して感謝していました。いつも時間に正確で、仕事を早く済ませ、ミスをほとんどせず、いつも正直だったからです。しかしここでは、人々は時間に遅れることをほとんどの場合気にしません。人々は本当に細かいことを気にしないのです。

佐: ではあなたは今ハワイで暮らすことにストレスを多く感じているのですね。

C: ええ。

佐: なぜハワイへ戻ったのですか? 教師の仕事を終えたからですか?

C: いいえ。鬱状態になったからです。(中略) 働いていた会社を辞めたのはすべて鬱のためです。それはおそらく私のアイデンティティクライシスに結びついています。それがおそらく鬱を引き起こした原因です。

佐: どこが居場所なのか分からなかったのですか?

C: ええ。ハワイが居場所だと思ったのですが、違うようです。だから私は「どこに行けばいいのか」といった感じです。いつも日本に残っていたらと考えます。その方が少しはましだったでしょう。

(会話⑳)

Cは日本で働く中で、**会話㉓・㉔**などで語られた経験の後、鬱状態に陥ってしまう。そしてそれが原因で仕事を辞め、2018年、居場所を求めて地元ハワイへと戻った。しかし、10年間にわたって日本で生活し、日本でしか就労経験を持っていなかったCにとって、もはや生活や働くうえでの基準は日本のものになっていたのであろう。彼は現在、日本社会にもハワイ社会にも自分の居場所を見出せずにいるのだ。

5.3 考察

本章では、Cに対する2次調査について分析を行い、Cが1度目の日本留学時から、ハワイへ帰島した今もなお直面しているアイデンティティクライシスについて記した。Cは1次調査における**会話㉒**の中で自分のアイデンティティについて「80%日本人、20%アメリカ人」と語っており、日本への強い帰属意識を表明していた。しかし、Cは2次調査において、その日本社会での困難や苦悩について語った。日本社会に居場所を見出せず、居場所を求めて出身地であるハワイに戻ったが、そのハワイ社会に馴染めず、現在もハワイでの生活に苦痛を抱いている。さらに、彼はインタビュー後の自由

会話の中で、「自分自身とは合わないと感じるアメリカ本土出身者がマジョリティであるアメリカ社会にも帰属意識を持ってない」と話した。「どこに行けばいいのか」というCの苦悩は、ルーツを複数社会に有する日系移民であれば誰もが直面する可能性があるものである。

以上、2次調査によってCのアイデンティティの複層性と流動性がいっそう明確になった。但し、このことは、1次調査におけるA、B、Cの語りとその分析の価値と信用を損なうものではない。1次調査で語られたことは、真実である。そして、Cが2次調査において語った事柄が1次調査のそれと矛盾していても、それも、真実なのである。Cに対する1次調査と2次調査の結果の相違は、5.1に引用した「定量分析によって結果を一般化することより、むしろ少数の個人の長期的変化を追うケーススタディ」が求められることの証左であると受け止めるべきだろう。

6. おわりに

6.1 結論

本論文では、ハワイ島外での生活経験を持つハワイ出身の日系アメリカ人3名にアイデンティティに関するインタビュー調査を行った。考察の結果、3名それぞれのアイデンティティは大きく異なっており、「ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ」を一般化して提示することはできなかった。しかし、以下3つの共通点がみられた。

まず、**3名全員がアメリカ本土出身者との違いについて認める、もしくは、違いを自覚した経験を持っていた。**そして、その自覚や経験は、彼らのアイデンティティに大きな影響を与えていることが分かった。岩崎(2018, p.16)は「人は他者との関係の中に存在し、他者との差異の認識によってアイデンティティが構築される」と述べている。同じアメリカ国民でありながら、自分と異なる文化や価値観、社会的地位を有すアメリカ本土出身者と出会い、自分との差異を見出す。そして、自分と異なる彼らがマジョリティであるという事実が、自分を見つめなおし、マイノリティとしての自らのアイデンティティについて考えるきっかけとなっていた。ハワイはアメリカ本土から遠く離れていることに加え、様々なエスニックグループが共に暮らす多様な社会である。さらに、日系人をはじめとした有色人種がマジョリティであるハワイの社会構造は、アメリカ国内では特殊と言える。ハワイで生まれ育ち、さらに日本という他国にルーツを持つハワイ出身の日系移民がアメリカ本土で育った人々との間に差異を見出すことは自然なことであろう。

次に、**国際的移動に際して3名全員がアイデンティティクライシスを引き起こしたり、自分のアイデンティティについて悩んだりした経験を持つこと**である。今回の調査対象者の3名は、全員、以前もしくは現在ハワイの外での生活経験がある。岩崎(2018, p.17)はBlock(2007)を引用して「自己のアイデンティティが意識されたり問題となったりするのは、それまでは当然の如く受け止め安定していると思われたアイデンティティが、何らかの衝突や矛盾で揺らぐ時である」とし、「それを引き起こす経験の代表例として挙げられるのが空間的・文化的な移動である」と述べている。Cは留学する為にハワイから日本へ移動した後、また、日本での仕事をやめてハワイへ帰島した後、その両方でアイデンティティクライシスに陥ったと話した。他方、AとBはハワイからアメリカ本土への移動後、自分のアイデンティティが揺らいだ経験について語った。つまり、3名全員がアイデンティティクライシスを引き起こしたり、自分のアイデンティティについて悩んだりした経験を持っていた。彼らのアイデンティティと1.3に引用したハワイ日系移民1世・2世・3世のアイデンティティとの相違は、各時代の世界・社会の出来事や有り様の相違を反映したものである。

最後の共通点は、**アイデンティティに流動性と複層性がみられること**である。これは多くの先行研究が

明らかにしてきたとおりの結果であり、ここでは繰り返さない。

さて、ハワイ日系移民4世・5世が生きる現代社会は、人々が「空間的・文化的な移動」を経験することが日常化した社会であると言える。それは、人々がアイデンティティクライシスやアイデンティティについて悩む可能性が高まったことを意味している。A、B、Cが語った経験および彼らのアイデンティティは、そのような現代社会の象徴として捉えることができるだろう。

6.2 今後の課題

本論文では、先行研究の少ないハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティの記述にあたり、対象者を3名に限定して調査・分析を行い、6.1に記した結論を導いた。しかし、アイデンティティは複層性や流動性を持っており、この3名のアイデンティティをより詳細かつ明確に記述するためには、期間を置いて調査を繰り返す必要がある。そのことを通じて、彼らの新たなアイデンティティの認識や、これまでのアイデンティティの再認識、そしてその変化の軌跡を理解することができるはずである。その後、対象者を増やして同様の調査・分析を行い、傾向を捉えたい。それを踏まえて、多人数を対象とする量的な調査を行うべきである。そのことによって、1.1に本論文の目的として記した「ハワイの日系移民4世・5世のアイデンティティがどのような構造を成しているか、また、それが形成された軌跡や要因を明らかにする」ことができるだろう。

6.3 本研究のもう一つの価値と意義

本論文の第1著者の佐藤は、本論文の基となった卒業論文の執筆中、また執筆後も、調査対象者の3名、特にCに対して、「自分の研究は、彼(ら)のトラウマを引き出したただけだったのではないか」という不安を抱き、それを、卒業論文の指導教員であり、本論文の責任著者でもある小川に繰り返し訴えていた。小川は、その都度、佐藤の研究は学術的に高い価値があり、同時に、社会貢献にも繋がる、意義深く重要なものであると伝えた。

そのような困難を乗り越え、2020年1月末に卒業論文は提出され、佐藤は大学を卒業し、4月から社会人生活を送り始めた。その佐藤のもとに不意にCから以下のメッセージが届いたのは5月31日(日)の夕刻のことであった。原文をそのまま引用する。

お久しぶり！

It's been a while but I wanted to say congratulations on your graduation!

I also wanted to thank you for the research you did. Your research is priceless to Japanese American Culture in Hawaii, and you helped me reanalyze who I am as a person.

Yayoiの卒論に間に合わなくて申し訳ないけど、いきなりすぎるし、質問してくれたことを思い返したり自問自答したりして、僕の生き様は文化の狭間を行き来(彷徨い?)するのは使命というか…んん…うまく言えないけど、1つの文化に属せず柔軟に器用に自身を創ることが大切ということに気がついた。

Maybe you have experienced the same thing from living in Hawaii and then moving back to Japan. There's a transition where you feel in-between two cultures.

Cは、佐藤の研究を「Your research is priceless to Japanese American Culture in Hawaii」と評価し、同時に自分自身がどのような人間であるかを理解する手助けをしてくれた、と佐藤に感謝している。

佐藤が小川に訴えた不安はもっともなことであった。そして、A、B、Cの3名が、アイデンティ

ティに関わる、苦く、辛い経験と想いをきわめて率直に佐藤に語っているのは、不安な気持ちを抱きつつも、調査対象者の苦しみ、悲しみ、アイデンティティ、人生に寄り添い、共感しようとした佐藤の姿勢あってこそのものであったろう。

人々の国際的な移動が日常化し、日本国内においては外国人労働者の受け入れが進む状況下において、移住者やその子孫、あるいは複数の文化にルーツを持つ人々のアイデンティティに寄り添い、理解し、共感することは、望ましい多文化共生社会を創りあげてゆくために必要不可欠の事柄である。卒業論文執筆中、執筆後の佐藤の在り方、そして、しばらくしてCから佐藤に届いたメッセージは、それを実現するための一つの道筋、手がかりを、確かに示していると思われる。

〔附記〕本論文は、第1著者の佐藤が、2020年（令和2）年1月に県立広島大学に提出した卒業論文『ハワイ日系移民4世・5世のアイデンティティ』に基づく。

引用文献および主要参考文献

- Abe, David (2011). 「日系アメリカ人仏教徒4世・5世のアイデンティティにおけるエスニシティと宗教の意義—ハワイ州コナにおけるケース・スタディから—」『多文化共生研究年報』8, 83-119.
- 朝日祥之・原山浩介編 (2015). 『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』東京堂出版
- Block, D. (2007) *Second language identities*, Continuum
- 中国新聞「移民」取材班 (1992). 『移民』中国新聞社
- ハワイ日本人移民史刊行委員会編 (1964). 『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会
- Hiramoto, Mie (2010). Dialect contact and change of the northern Japanese plantation immigrants in Hawai'i, *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 25(2), 229-262.
- 広島県編 (1993). 『広島県移住史—通史編—』広島県
- Hornberger, Nancy H., and Sandra Lee McKay, eds. (2010). *Sociolinguistics and Language Education, Multilingual Matters*
- 飯田耕二郎 (2003). 『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版
- 岩崎典子 (2018). 「「ハーフ」の学生の日本留学—言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー—」, 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』くろしお出版, 16-38.
- Jackson, J. (2017). Case studies of study abroad: Making sense of developmental trajectories. *System*, 71, 122-124.
- 川崎壽 (2020). 『ハワイ日本人移民史—1868—1952（明治元年—昭和二十七年）—』ハワイ移民資料館仁保島村
- 高民定 (2016). 「日本の外国人移住者の言語環境と言語管理—言語バイオグラフィーの通時的・共時的語りの分析から—」『グローバル・コミュニケーション研究』4, 169-196.
- Liu-Farrer, G. (2012). Becoming new overseas Chinese: Transnational practices and identity construction among the Chinese migrants in Japan. In C.Pluss & C. Kwok-bun eds. *Living intersections: Transnational migrant identification in Asia*, Springer, 167-190.
- 前山隆 (2001). 『異文化接触とアイデンティティ—ブラジル社会と日系人—』御茶の水書房
- 三宅和子 (2018). 「国際結婚家庭2世代の「移動」と「選択」—母から娘の50余年間の軌跡をたどる

- ー), 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』くろしお出版, 126-148.
- ナカノ・T・メイ著, サイマル・アカデミー翻訳科訳 (1992). 『日系アメリカ女性—三世代の100年—』サイマル出版会
- Nordyke, Eleanor C., and Y. Scott Matsumoto (1977). The Japanese in Hawaii: A Historical and Demographic Perspective, *Hawaiian Journal of History*, 11, 162-174.
- Sakoda, Kent, and Jeff Siegel (2003). *Pidgin Grammar: An Introduction to the Creole Language of Hawaii*, Bess Press
- 白水繁彦 (1993). 「ハワイ日系社会の文化変化—第二次大戦下二世の米化運動—」『コミュニケーション紀要』7, 159-198.
- 白水繁彦 (2004). 「エスニック文化とアイデンティティの世代間継承—ハワイ沖縄系コミュニティにおける事例研究—」『移民研究年報』10, 21-42.
- 白水繁彦 (2006). 「ウチナーンチュ・スピリットのゆくえ—エスニシティで繋がる世界—」『コミュニケーション科学』24, 57-64.
- 白水繁彦 (2006). 「フェスティバル、フード、そしてアイデンティティ—ハワイにおける「沖縄料理」の政治学序説—」『武蔵大学総合研究所紀要』16, 43-63.
- 白水繁彦 (2015). 「自分たちの表しかた—さまざまなアイデンティティ表象—」, 白水繁彦編『ハワイにおけるアイデンティティ表象—多文化社会の語り・踊り・祭り—』御茶の水書房, 19-68.
- 白水繁彦・山下靖子 (1997). 「エスニック・アイデンティティの覚醒運動—ハワイ・オキナワン・コミュニティのコミュニケーション論的分析—」『武蔵大学総合研究所紀要』7, 41-80.
- 高木真理子 (1992). 『日系アメリカ人の日本観—多文化社会ハワイから—』淡交社
- タカキ・ロナルド著, 富田虎男・白井洋子訳 (1986). 『パウ・ハナーハワイ移民の社会史—』刀水書房
- 和田邦彦 (1991). 「日系人それぞれの道-1-ハワイ—日本人であることを意識しない世代—情緒は残しながら同化が進む3世4世—」『世界週報』72(46), 40-45.
- Yokota, Thomas (2008). The “Pidgin Problem”: Attitudes about Hawai‘i Creole, *Educational Perspectives*, 41(1・2), 22-29.

Abstract

Identity of the 4th and 5th generation of Japanese Immigrants in Hawaii

Yayoi SATO, Shunsuke OGAWA

The purpose of this paper is to clarify the identity of the 4th and 5th generation of Japanese immigrants in Hawaii. The survey was conducted on three people in English. The conclusions are as follows;

- 1) The identities of the three people are very different from each other and cannot simply be generalized.
- 2) On the other hand, there are three things in common.
 - (1) They believe that the 4th and 5th generation of Japanese immigrants in Hawaii and the people who were born and grew up in the mainland of US are same “American” but distinguished from each other.
 - (2) They have some experience of facing an identity crisis or questioning their own identities when they travelled abroad.
 - (3) Their identities are fluid and multitiered.

This paper is one of the very first reports on the identities of the 4th and 5th generation of Japanese immigrants in Hawaii. More research is needed to get an accurate picture of their identities.

Key words: interview survey, multicultural symbiosis society, Hawaiian Creole English (HCE), multitiered, fluidity